

埼玉県IPM実践指標(チャ) (平成17年度策定、令和2年9月改定)

管理項目	管理ポイント	点数	チェック欄		
			昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
カンザワハダニの防除要否	一番茶萌芽期の古葉におけるカンザワハダニの寄生葉率が20%よりも多い場合にのみ、ハダニの防除を実施する。	1			
非化学合成農薬によるハダニ防除	一番茶期のハダニ防除において、ミルベメクチン乳剤やデンブン液剤等の非化学合成農薬を使用し、一番茶芽に化学合成農薬を散布しないようにする。	1			
天敵にやさしい農薬によるハダニ防除	一番茶期のハダニ防除において、天敵であるハダニアザミウマに対して影響の少ない農薬を使用する。	1			
天敵にやさしい農薬によるクワシロカイガラムシ・チャトゲコナジラミ防除	春期にIGR系殺虫剤であるピリプロキシフェンMCを1回散布することにより、クワシロカイガラムシやチャトゲコナジラミの各世代ごとの防除削減に努めている。	2			
	クワシロカイガラムシの天敵に影響の少ない殺虫剤(IGR系殺虫剤等)を使用する。	1			
	クワシロカイガラムシの天敵ヒメアカホシテントウが多い8月上旬までは、他害虫の防除でもIGR系殺虫剤を中心に使用している。	1			
	クワシロカイガラムシとチャトゲコナジラミは両種に登録のある薬剤を使用し、同時防除に努めている。	2			
米ぬかによる害虫発生抑制	茶株内や葉裏に米ぬかを付着させて、クワシロカイガラムシやチャトゲコナジラミの発生を抑制させ、また土壌にすき込むことで線虫の抑制を図り、不必要な化学農薬の使用削減に努めている。	1			
生物農薬・非化学合成農薬による防除	クワシロカイガラムシやチャトゲコナジラミの防除対策として、冬期においてマシン油乳剤散布を実施する。	2			
	カンザワハダニの防除に、ミヤコカブリダニ製剤を使用する。	1			
	ハマキムシ類等の発生抑制として性フェロモン剤やBT剤、または顆粒病ウイルス剤を使用する。	1			
	ハマキムシ類の発生抑制として性フェロモン剤等の効果が弱くなる秋期に顆粒病ウイルス剤やBT剤を使用する。	2			
	スリップスやハマキムシ類の防除に、スピノサド製剤を使用する。	1			
整せん枝	すそ刈り時期:クワシロカイガラムシのふ化幼虫を飛散させないように、ふ化幼虫発生時期には実施せず、幼虫定着後に実施するようにしている。	1			
	浅刈り:一番茶収穫後に炭疽病、チャノミドリヒメコバヤの発生を抑制する目的で浅刈り整枝を実施する。	1			
	深刈り:一番茶収穫後にチャトゲコナジラミの発生を抑制する目的で深刈り整枝を実施する。	1			
	8月整枝:二番茶収穫期以降から8月上旬までに炭疽病、チャノミドリヒメコバヤの発生を抑制する目的で上位3葉程度の整枝を実施する。	2			
	秋整枝:10月中旬に整枝処理(翌年の摘採面から約5cm)を行い翌年一番茶期のチャドクガ等の発生抑制対策を実施する。	2			
バンカー植物の利用	クワシロカイガラムシ等のカイガラムシ類、チャトゲコナジラミ、カンザワハダニ、ツマグロアオカスミカメの発生抑制のため、ほ場の周辺にバンカー植物として、ナギナタガヤ、ヘアリーベッチ、ミント等の草地帯を設けている。	2			
抵抗性品種導入	クワシロカイガラムシ抵抗性品種の‘さやまかおり’、‘さいのみどり’を作付け面積の2割以上で導入する。	1			
雑草対策	耕うん以外に化学農薬の使用によらない何らかの雑草管理対策(木材樹皮の被覆、雑草防止シート等)を実施する。	1			
	雑草管理対策として、茶園周辺または茶園内にナギナタガヤ、ヘアリーベッチ等のアレロパシー植物を植栽している。	2			
土づくり	落ち葉堆肥や米ぬかなど有機物を利用して土づくりを行い、病害虫に強い茶樹の育成に努めている。	1			
病害虫発生予察情報の	病害虫防除所が発表する発生予察情報を入手し、確認する。	1			

確認					
農薬の使用全般	十分な薬効が得られる範囲で最小の使用量となる最適な散布方法を検討した上での使用量・散布方法を決定する。	1			
	当該病害虫・雑草に効果のある複数の農薬がある場合には、飛散しにくい剤型を選択する。	1			
	農薬を使用する場合には作用機作の異なる農薬をローテーションで使用する。	1			
	農薬散布を実施する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で使用する。	1			
作業日誌	病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のIPMに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。	1			
		合計 点数			

(茶業研究所作成)